

# 伝説の終焉

デルフィニア戦記  
16

茅田砂胡

中央公論新社



### 目次の操作方法について

・表示させたい部分にカーソルを近づけると手の形に変わります。ここでクリックすると、該当の頁までジャンプさせることができます。

地 挿

図 画

齋 藤 由 加  
沖 麻 実 也

## 目次

|      |       |     |
|------|-------|-----|
| 1    | _____ | 10  |
| 2    | _____ | 26  |
| 3    | _____ | 38  |
| 4    | _____ | 49  |
| 5    | _____ | 63  |
| 6    | _____ | 86  |
| 7    | _____ | 111 |
| 8    | _____ | 124 |
| 9    | _____ | 154 |
| 10   | _____ | 190 |
| 11   | _____ | 214 |
| 12   | _____ | 242 |
| 13   | _____ | 259 |
| あとがき | _____ | 269 |



**ヘンドリック**◎伯爵。国内屈指の豪傑。

**アヌア**◎侯爵。近衛兵団司令官。

**セリエ**◎ポートナム領主。ナシアスの代理としてビルグナ砦を守るものの、パラストの夜襲によってビルグナを陥落させられた。

**グラハム**◎地方領主。かつてパラストに騙され、ウォルを裏切ってしまった。

**カリン**◎女官長。ウォルを暗殺の危機から救った。

**カーサ**◎王宮内にあるサヴォア公爵家に仕える執事。

**タルボ**◎ドラの副官。

**コンフリー**◎クリサンス騎士団長

**ルカナン**◎連隊長。

**オルテス**◎サンセベリア国王。デルフィニアに密かに庇護を求めている。

**リリア**◎サンセベリア王妃。

**ダルトン**◎オルテスの信頼する部下。

**オーロン**◎パラスト国王。

**ゾラタス**◎タンガ国王。

**ナジェック**◎ゾラタスの嫡子。以前、リイを甘く見て手ひどい敗北を受けている。

**コリウス**◎スケニア国王。

**ヴァンツァー**◎ファロット一族。シェラを狙っている。

**レティシア**◎ファロット一族。たびたびリイ暗殺を試みる。

**ファロット伯爵**◎北の大国スケニアの重臣。暗殺集団ファロット一族の長。

**モイラ**◎ファロットの聖霊

**ルウ (ルーファセルミィ・ラーデン)** ◎ラー一族。リイの相棒。

**グライア**◎ロアで黒主と呼ばれていた悍馬。リイを認め、乗騎を許す。

**ゴルディ**◎パキラ山脈ルブラムの森に棲む狼。リイの友人。

# CAST

**ウォル (ウォル・グリーク・ロウ・デルフィン)** ◎デルフィニア国王。庶子であったため、一度はその地位を奪われるも多くの味方を得て再び王冠を被る。統率力に優れ、無私公正。戦士としても優秀。

**リイ (グリンディエタ・ラーデン)** ◎異世界から来た少女。華奢で可憐な外見とは裏腹に無双の剣の腕と戦士の魂を持つ。ウォルの王権奪回に類を見ない活躍を示し、戦女神と讃えられる。後にウォルと結婚、デルフィニア王妃となる。

**シェラ**◎リイ付きの女官。実は少年。元・特殊技能集団ファロットの一員。

**バルロ**◎国内の名門サヴォア一族の当主で、公爵。ティレドン騎士団長。ウォルの従弟で毒舌家。ウォルのことを早くから国王と支持した。ロザモンドと結婚、2児の父になる。

**イヴン**◎独立騎兵隊長、兼親衛隊長。ウォルの幼なじみ。タウの東峰にあるベノアの副頭目。シャーミアンと結婚。

**ナシアス**◎ラモナ騎士団長。バルロの友人。ラティーナと結婚。

**ポーラ・ダルシニ**◎小貴族の娘。現在はウォルの愛妾。

**ドラ**◎将軍。名馬の産地として名高いロアに領地を持つ伯爵。ウォルの養父フェルナン伯爵の親友だった。

**シャーミアン**◎ドラの嫡子。女騎士。イヴンと結婚。

**ジル**◎ベノアの頭目。イヴンを高く評価している。アビーと結婚。

**ロザモンド**◎ベルミンスター公爵家当主。バルロと結婚。

**ラティーナ・ジャンペール**◎複雑な理由から、一時ウォルの愛妾だった。現在はナシアスと結婚。

**ブルクス**◎宰相。デルフィニアの裏も表も知りつくしている。

**アスティン・ウェラー**◎ティレドン騎士団の副団長

**キャリガン・ダルシニ**◎ポーラの弟。ティレドン騎士団員。

# アベルドルン大陸図



# 伝説の終焉

デルフィニア戦記 16

*Selfmian War*  
A RECORD OF THE

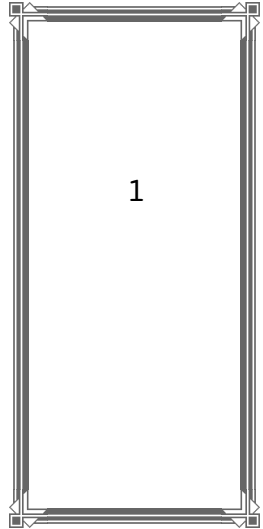




我らたそがれの一族なり。

光り輝くことも、闇にとけ込むこともかなわぬ、異形の一族なり。

やがて現れる月の子が太陽に導かれ、闇へと帰るその日まで、我ら永久に  
さすらう一族なり。



## 1

幼なじみの結婚式にこっそりと参加した国王は、ひとまずコーラルに戻ることにした。

理由はいろいろある。タンガ軍の勢いは予想通り衰えて<sup>おとろ</sup>いる。本当ならここで国王が一気に進撃して決定的な勝利を掴むべきだが、そう簡単にはいかない理由が西にあった。

ビルグナは依然、アンテシユ將軍率いるパラスト軍に占拠されたままだ。

これを奪回に向かったヘンドリック伯爵は、並外

れた勇猛と戦<sup>いくさ</sup>上手によつて、国内外にその名を轟<sup>とどろ</sup>かせた人である。すでに六十を越えた老齢だが、火のような闘志は依然衰えない。三人の息子達も立派な武將に成長し、父親の大きな助けになっている。その伯爵をもつてしても、ビルグナの奪回は容易なことではなかった。

籠城<sup>ろうじょう</sup>した敵を攻めるのは野戦に比べて遙<sup>はる</sup>かに難しい。しかも、パラスト軍は守りの戦にかけては中央一の実力を誇っている。その彼らにビルグナという鉄壁<sup>てつへき</sup>の砦<sup>とりで</sup>を与えてしまったのだ。

戦巧者の伯爵が知恵と力の限りをつくし、連日、砦を揺らさんばかりの勢いで攻め立てているのだが、やすやすと陥落するはずがない。

国王と王妃は、シャーミアンの花嫁姿を堪能した後、暗い夜道を仲良く連れ立って、カムセン砦へと戻る途中、この事について話をした。

「テバ河を確保できないのが惜しまれる。イヴンやイゴールどのがパラスト軍を追い払ってくれても、

敵地と化したビルグナとパラスト本国とに挟まれて  
いる砦だ。こちらの足場にはできん」

「それをいうなら、ビルグナも条件は同じはずだぞ。  
デルフィンア本国の中にある砦なのに、パラストの  
兵隊は乗り込んできて確保したじゃないか」

「一緒にはできんさ。第一に、砦そのものの規模が  
桁外れに違う。蓄えてある糧食も武器も段違いだ。  
ナシアスは有能な指揮官だからな。数年の籠城にも  
耐えられるだけの備蓄はととのえてある。一方、テ  
バ河の砦はと言えば、もともと国境の門として使  
っていたものだ。頑丈ではあるが、長期の包囲戦に  
耐えられるような造りではない」

こちらの領土にしたときにその点を改造しておく  
べきだったのだが、テバ河はそっくりこちらの領土  
になったのだ。そんなことをして、パラストを刺激  
したくないという気持ちもあった。

「パラストの武将は皆、籠城戦の達人だ。こちらが  
期待するような失策はまず犯すまいよ」

「どんな失策を期待してるんだ？」

月もない暗夜、明かりも持たずにすたすと歩き  
ながら王妃が言う。

国王は王妃ほど夜目が利かない。隣を歩く王妃の  
気配を察し、その動きに沿って足を運んでいる。

常人には到底不可能な真似だが、この二人には何  
でもないことだった。

まったくの暗闇に、男女の話し声と、ひたひたと  
歩む足音だけが響いている。その様子は、さながら  
魔物の道行である。

「例えば、わざと偽の噂を流して敵の動揺を誘う。  
兵隊の家族が捕らえられたとか、本国が危ないとか。  
その上で内通する者を探して手引きさせたいのだが、  
何度も言うが、彼らは籠城戦を熟知している。砦に  
閉じこめられ、外部の味方との連絡を遮断され、な  
おかつ敵に包囲されているという、緊張の上にも緊  
張を強いられる兵士の心理を知りつくしている。こ  
ちらが手練手管を用いて敵を浮き足立たせようとし

でも、彼らはそれ以上に、自軍の動搖を押さえる手法に通じているとみるべきだ」

「となると、何ができる？」

「一番確実なのは城塞を破壊することだが、これは支度も時間も掛かりすぎる。何よりビルグナに穴を開けたくはない」

「で？ お前が行って直に片をつけるのか？」

「それはヘンドリック伯爵に任せてある。俺はただ、ここからもビルグナからも等しい位置に身を置いておきたいだけだ」

仮にそのどちらで事態が悪化しても、同じ時間で駆けつけるために。

明かりを持つているかのように難なく歩きながら、王妃は肩をすくめた。

「まったく。国王なんてのはとことん厄介な商売だ。おれはどうする？ ここでドラ將軍の手伝いでもしようか？」

「うむ」

国王は相槌を打ったが、生返事だ。何か考え事をしていられない。

「なあ、リイ。スケニアはあれで本当に手を引くと思うか？」

王妃は意外そうな顔になる。コーラルでの海戦はこちらの大勝利に終わったのに。

「お前は思わないのか？」

「うむ。取り越し苦労ですめばいいのだが、お前の侍女の元の飼い主のことが気になる」

「イヴンが探り出した、あれだな？」

「ウルリック達を担ぎ出したのは、ファロット伯爵一人の才覚だったという。どんな手段を使ったのか、

三十数年前も前の出来事を調べ出した上でだ」

言いながら、国王は王妃を窺った。王妃も頷きを返した。

誰もが知っているような話ではなかった。牢番はそのことをほとんど誰にも話さなかったはずだった。それなのに、ファロット伯爵は突き止めた。

どうして伯爵にはそんなことができたのか？

二人には心当たりがあった。この世にありながらこの世のものではない、意識を持って存在しながら通常の人には関知されない、ファロットの幽霊。

彼らが伯爵のために働いたのだとしたら、そしてその伯爵が、国家としてのスケニアに従っているとしたら、これはとんでもないことになる。

彼らはどこへでも潜入することができる。どんな秘密の会話も自在に聞き取り、あらゆる重要書類を見ることが出来る。

「魔法街の賢者の話によれば、そういうことは禁じられているはずだ。彼らのようなものは闇に潜んでいなければならない。表向きの政策に関わることも許されていないはずだが、俺には今になって思い当たる節がある。スケニアに送り込んだ細作が誰一人として、艦隊製造の動きを報告しなかったことだ」

「始末された可能性は？」

「ない。今も定期的な報告は欠かしていない」

「となると、その連中は全員スケニアに寝返ったか、でなければ……」

「彼らとはとくに死んでおり、俺の手元に送られてきている報告書がすべて偽物か、だ」

二人は深刻な表情で黙り込んだ。

狼煙のろしや口頭を別にすれば、通信手段と言えば紙に文字を記すしかなく、本人かどうかの確認も、その書面によってするしかない。

当然のように筆跡というものが非常に重んじられ、これを判断する人の眼も実に厳しかった。

手紙というものは保存が利く。好きなきに取り出して何度も見直し、以前に貰もらったものと照合することができる。

知っている人物の筆跡を見誤ることはその人物の顔を見誤るのも同然であると、そう言いまわることができるほど、一定以上の教養の持ち主ならば誰でも正確に、紙に記された文字に個性を見いだすことができるのだ。

まして、国王とその側近の目をごまかすほど精巧な偽の書簡をつくるのは容易ではない。送り続けて見破られないとなると、至難の業だ。

「名にしおうファロット一族ならば、そのくらいの芸当はやってのけるかもしれん」

「そうだな」

王妃も相槌を打った。

シエラと因縁のあるあの黒い男も、以前、城内の

子爵家に堂々と客人として滞在していたことがある。

偽の紹介状一つで、あの男は子爵家の人々を欺あざむ

き通したのだ。

「彼らがその技の使用をスケニア内部に制限しているのなら、直接こちらに被害は及ばんだらう。だが、同盟を理由にタンガにも手を貸しているとしたら、少々おもしろくないことになる」

歩きながら王妃は肩をすくめた。

国王の懸念が事実ならば、現在のデルフィニアの優勢は何の意味もないことになる。

情報を制する者が勝利を制するのだ。その情報をおき勝手に操作できるとなればなおさらだ。

「でも、それはお前の考えすぎかもしれない。ケイファードからの報告はまともに届いたんだらう？」

「確かにな」

「スケニアだってコーラルであれだけ惨敗したんだ。タンガとの同盟を破棄したかもしれない」

「そうだな」

口では肯定しながら、国王は納得していない。

王妃の口調にも確信の響きはない。これは単なる仮定であり、希望の混ざった推測にすぎない。

仮定そなわものを前提にして動くのはあまりにも危険だ。

二人はまた無言となり、カムセン砦の灯火を眼に確かめたところで、国王が口を開いた。

「俺も一つ仮定の話をしよう。タンガとスケニアの関係がまだ続いているとする。そして、ファロット伯爵がタンガのためにも働いているとすると、スケニアの例もある。今のケイファードへ細作を遣わし

でも、あまり芳かんばしくない結果に終わるはずだ」

「だろうな」

「しかし、どうしても確認しなければならん。言うまでもなく困難な務めだ。絶対に信用のおける、しかもそんな魔窟まくつに潜入して戻って来るだけの技倆ぎりょうの持ち主といったら、お前なら誰を推挙する？」

王妃はまた肩をすくめて笑った。

「愚問だな。おれかシエラのどちらかしかない」

「では、お前の侍女に行つてもらおう」

「そう簡単に出張を言いつけるなよ。あれはおれの侍女だぞ」

「だからこうして筋を通して」

「おれが行けばすむ話だろうが」

「お前はだめだ。問題外だ」

砦まで戻ると、二人が何も言わないうちから門が開き、クリサンス騎士団長コンフリーが出迎えた。

蒼い顔をしていた。

彼はランバーから応援に来ていたのである。砦の

責任者であるドラ將軍が娘の結婚式に出席するため、一時的にでも砦を開ける。その留守を任されたのだ。

特に国王夫妻からは眼を離さぬようにと將軍は念を押したし、コンフリーもそのつもりで見張っていたのだが、今、二人は堂々と外から帰ってくる。

「夜番、ご苦労」

「きれいな花嫁だったぞ」

何とも脳天気な台詞せりふのおまけつきだ。力の抜ける思いがしたが、相手は仮にも主君とその妃である。

ドラ將軍なら特大の雷を落とすかもしれないが、コンフリーには一言、ご酔狂がすぎますと釘を刺すのが精一杯だった。

防壁の上や庭の随所に大きな篝かがりび、火が灯され、砦は真昼のような明るさである。

王妃のために用意された部屋は二階にあつたので、窓を開けると、その様子がよく見えた。篝火が風にな大きく揺れ、火の粉がぱつと宙に散る。ほんの一瞬、暗がりの中に跡を残しては消える、赤い乱舞だ。

シエラが酒肴の支度を調べて現れた。特徴のある銀の頭を白い布で包み、小者の衣服もござっぱりとして、なかなか堂に入った従者ぶりである。

侍従は待つのも仕事のうちだ。小者に姿を変えた彼は王妃が戻ってくるまで、次の間にじつと控え、その気配を察すると、恐らくは夜道を徒歩で戻ってきただろう主人のために、何も言われないうちから酒肴を用意して差し出している。

国王もその酒肴に手を伸ばした。シャーミアンの花嫁姿は眼には十分な堪能を与えてくれたが、何分おおっぴらには顔を出せない宴だったのだ。胃袋が少々寂しい。

シエラが手早く並べたのは、蜂蜜を塗って焼いた鶏の塩漬け肉、薄く切ったライ麦のパンにチーズ。

国王夫妻の晩餐にしては慎ましいものだったが、二人とも舌鼓を打ちながらあつという間に平らげってしまった。食卓用の硝子器に移されていた果実酒も競うように空にしてしまう。

その様子を眺めながら、シエラは密かなため息をついていた。

国王と王妃に手酌で吞ませてばんやり突っ立っているようでは従者失格である。わかつてはいるが、手を出す暇がないのだ。

「おかわりをお持ちしましょうか?」

給仕は諦めてそう言うのと、二人とも首を振った。

「もう充分だ」

「シエラがつくるものは何でもおいしいな」

「焼いただけですよ? 誰がやっても同じ味です」

「いいや、王妃の言うとおりだ。こんな駐屯地でなかなか食えない味だぞ」

「だから、シエラをもつていかれると、おれが困る。おいしいものが食べられなくなる」

「お前、要するに、自分が行きたいのだろうか?」

国王がケイファードへの諜報任務のことを話すと、シエラは得たりと頷いた。

「それは当然、私が行くべきでしょうね」



「おれの食事はどうなる？」

王妃が真面目な顔でおかしな苦情を訴える。

「それが私のようなものの務めです。あなたには、あなたにしかできないことがあるはずですよ」

「うむ。王妃にはこの場に待機してもらいたい。ファロット伯爵がタンガから手を引いている確認が取れたら、一気に撃つて出たいが、そうでないなら迂闊には動けん」

王妃はちよつと、からかうような顔になった。

「居竦んでいるだけじゃ、戦況は何も変化しないぞ。それともこの王様は勝利が欲しくないのか？」

「俺のハーミアにしてはお粗末な言いぐさだ。欲しに決まってる。そのためにも無闇に突っ込んで自滅するような真似は断じて避けねばならん」

国王とは軍事や政治の最高責任者だ。

誰の許可も取らなくていい。誰の承諾も必要ない。その指導力と支配力を持って重臣達を納得させることさえできればいい。一人で考え、一人で決定し、

命令することができる。

その代わり、どんな結果が出ても一人で全責任を負わなければならない。そういう性質のものだ。

国王はファロット伯爵の存在を軽視するつもりは毛頭なかった。バルフル、ゴート、そしてベンク、彼らスケニアの先住民族は恐ろしく手強かった。

イヴンの並々ならぬ尽力によってどうにか和解し、味方につけることができたが、もし彼らがあのままスケニアに味方していたらと思うと、ぞつとする。

ファロット伯爵は自分では何もしていない。ただ指示を出しただけだ。

多額の報酬の代わりに恩義で縛って背かぬように、国家への忠誠心の代わりに戦士の誇りを楯に取って、彼らの意志を封じ込め、自由を奪い、彼らには何の怨恨もないデルフィニアに対して全力で戦うことを強いた。死をも厭わぬ戦闘へ誘導したのだ。

「自軍の兵力は温存し、できるだけ他人に戦わせる。連合して戦う時の定石だが、それにしても恐ろしい

手腕だ。いつまでもそんなものと手を結んでいたら、タンガとてどう踊らされるかわからんぞ」

まるでその行く末を心配しているような国王に、王妃は真顔で勧めたものだ。

「いっそ隣人のよしみで忠告してやればどうだ？」

「まったくもってそうしたいところだが、タンガはタンガでスケニアを利用するつもりでいるだろう。果たして本当に利用されているのはどちらなのか、俺としては非常に気になるところだ。それによって戦う相手が違ってくるからな」

国王もあくまで真面目に答え、シエラに眼をやる。

慎ましくその場に控えていたシエラは、紫の瞳に思慮の光を浮かべて領いた。

「スケニアはコーラルでの敗戦に懲りてタンガとの同盟を破棄したのか、中央から完全に手を引いたのか、それを確認して参ればよいのですね？」

「そうだ。しかもできるだけ迅速にだ」

「かしこまりました」

方針が決まればシエラの行動は素早かった。

後片付けをすませ、細作としての身支度を調える。まだ夜明けにはほど遠い。砦の中こそ終夜絶えることない篝火に照らされ、真昼のような明るさに包まれているが、少し離ればそこには真の闇が広がっている。人は皆外出を慎む時間だが、夜道を苦しめないのはシエラも同じである。

与えられた部屋を後にして出発しようとする、とつづくに寝入ったと思っていた王妃が廊下に立っていた。シエラが何か言うより先に言う。

「無理はするな。伯爵がタンガに肩入れしていたら、ケイファードで待っているのはお前のお仲間だ」

「気をつけます」

神妙に答えた。ファロット一族の腕前はシエラが一番よく知っている。

自分と同じ里育ちの行者なら何とかできる自信がある。事実、四対一でも引けは取らなかつた。厄介なのはその上にいる連中である。以前、アランナを

暗殺しに来たような、ファロット一族の名を強烈な誇りとしている術者達だ。

「本当はお前一人でやりたくはないんだがな」

「だからといってついでにこられては私が困ります。

御大は諜報活動などなさるものではありませんよ。いよいよというときに軍勢を率いてお出ましになるものです」

王妃は少し顔をしかめ、軽く肩をすくめた。

「そりゃあそうなんだが、何のかんのとお前に頼つて、面倒なことはみんなお前にやらせてるみたいで、いやなのさ」

シエラは思わず、笑みをこぼした。

これは国王が王妃に対して言うのとまったく同じ台詞である。

おかしな人たちだ。一国の支配者の地位にあり、何万という軍勢の頂点に立ち、強大な力を動かせる身でありながら、決してそれに寄りかからない。

自分を慕う誰かを死に追いやる前に、この人達は

まず自分で動く。だからその後人が続く。そしてそれは何より大きな力となるのだ。

「そんなお気遣いは無用です。道具の一つと思って使つてくだされば……」

緑の瞳が今度は冷ややかに光る。

「シエラ。いい加減に覚えろ。おれはそういう言い方は好きじゃない。いやなら行かなくてもいいんだ。こんな言葉じゃ足らないようなら『行くな』と命令してやつてもいいんだぞ」

シエラは首を振った。

「その必要はありません。大丈夫です。必ず戻ってきますから」

「おれが言っているのはそういうことじゃない」

「リィ。あなたのほうこそわかっていらつしやらない。私は命じられていやいや行くのではありません。私にしかできないことだから行くんです。むしろ、やりがいを感じてさえているんですよ？」

王妃は無言でシエラを見つめていた。獣けもののよう

に感情の読みとれない、よく光る瞳だ。

シエラは居心地悪くなつて、思わず眼を伏せる。

「あなたや陛下のために役に立ちたいと、そういうことが今の私には嬉しいんです。あなたには主人に従う犬と変わらないように見えるかもしれませんが、これも間違ひなく私の意志です。いけませんか？」

「いや。上等だ」

王妃は笑つて、首を振つた。

「犬みたいだとは思わない。例えばウォルはおれの同盟者で友達だけだな。友達の喜ぶことができればおれだって嬉しい。ただ、お前はすぐに無茶やつて死にそうだから、それが心配なんだ」

「私だっていつまでも昔のままではありませんよ。これでも少しは考えているんです。第一、あなたが無茶を言えた義理ですか」

呆れたように言い返したシエラだった。朱に交われば何とやらである。王妃の下に来たばかりの頃はどこか遠慮がちに言葉を発しているようなところが

あつたが、近頃ではこのくらいのことは言うようになってる。

それで話を切り上げて出発しようとしたシエラは、ふと心を引かれた様子で振り返つた。

「あなたは死をどう思つていらつしゃいます？」

王妃は不思議そうな顔になる。

自分もシエラも、死とすぐ身近に接している生き物だ。今まで何人もの死に立ち会つてきた。殺したことも数え切れず、逆に殺されそうになつたことも一度や二度ではない。このカムセンにも東のビルグナにも、戦のあるところならどこにでも死は満ちているのだ。特別珍しいことでも、話題にするようなことでもない。

「どうしてそんなことを訊く？」

「別に。ただ訊いてみたくなつただけです。怖いと思つたことはありませんか」

「怖い、か……」

王妃は何故かちよつと笑つた。

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。